〈論　　文〉

ビジャ・エルサルバドルのある拡大家族

——貧困の経済学試論——

原　田　　金一郎

はじめに

1999年から7年間、毎夏1ヶ月ビジャ・エルサルバドルで過ごし、調査に携わってきた。既成の開発経済学の研究方法に飽き足らず、文化人類学の手法を取り入れ、インタビューによって論文を書くようになった。自然にそうなったのであって、けっして意識的にそうしたわけではない。その土地のことは、その土地に住む人間が一番よく知っていると思ったからである。こんな風にして書いた論文が、これで6本目となる。もう一区切りをつけていいころだと思い、本にまとめることにした。いわく、『ビジャ・エルサルバドル——貧困と闘うペルーの町』がそのタイトルである。補章1として「ペルーのビジャ・エルサルバドル工業団地とミクロ工業化——内発的・自力依存的開発戦略の一事例」（日本国際経済学会大会、於神戸大学、2001年10月21日発表。スペイン語版を2007年6月CELAO国際会議、於韓国ソウル、にて報告予定)、補章2として、"Villa El Salvador y la Globalización", (Boletín Nro 13-14, CECOSAM, Marzo 2005)を収録する予定である。

さて、ビジャ・エルサルバドルに話を戻そう。今まで書いた論文を整理すると以下のようになる。

1)「自主管理都市共同体ビジャ・エルサルバドル——代替的社会主義論のためのフィールド・ノート（予備的省察)」

2）「ビジャ・エルサルバドルにおける社会主義と工業団地――自主管理社会主義から住民コミューンへ」

3）「ビジャ・エルサルバドル精神衛生共同体センター――周辺社会における貧困と精神衛生」

4）「ビジャ・エルサルバドル地方政府――自主管理社会主義から参加的民主主義へ」

5）「ビジャ・エルサルバドルにおける女性組織と教会――貧困と闘う救世主の町」

見て取れるように、私の視点は年を追うごとに変化している。それだけビジャ・エルサルバドルへの認識が深まったという証拠であろう。出発点は、1989年から1991年にかけて崩壊したソ連・東欧の国家社会主義（われわれは現存社会主義と呼んでマルクスの原理的社会主義とは区別していた）に代替する社会主義を求めて、ビジャエルサルバドルの自主管理社会主義にたどり着こうとしたのである。しかし、ビジャ・エルサルバドルの自主管理社会主義は1987年ごろ解体してしまっていた。それに代わって地方権力を握ったのは、市当局（行政改革により地方政府と改名）であった。そのころ結成され成功を収めたのが、工業団地である。企業家を訪ね、雨の中を歩き回ったものである。結局、団地の成功はその産業別組合による自主的民主的運営によるものだとわかった。土台はやはり自主管理社会主義にあったのである。第３章は精神衛生共同体センターという NGO を調査対象にした。臨床心理学士たちとのインタビューは楽しいものであった。所長のカルメン・ピメンテルの全面的協力のもとに調査は行われた。貧困と闘う最前線に触れたのである。第4章は地方権力そのものの中身を訪ねてみた。市の助役であり、1989年最初にビジャ・エルサルバドルを訪ねたときからの畏友、ネストル・リオス・モラレスの協力により各局長とのインタビューが可能となった。そこで明らかとなったことは、市は参加型予算への住民の参加を通じて参加的民主主義の定着を試みているということである。めざすものは、やはり1970年代自主管理社会主義の時代に存在していた都市コミューン的統一なのである。第５章は、やはり貧困と闘う最前線である女性組織と教会を訪ねた。女性組織は、マリアエレナ・モヤノというカリスマ的指導

者を暗殺で失い、組織的には弱化していた。しかし、そこで踏ん張るのが女性の強さである。今後の健闘を祈りたい。教会は、グスタボ・グティエレスという指導者により「解放の神学」の実践という形で健闘していた。ビジャ・エルサルバドルにおけるキリスト教の影響力の大きさは、われわれ外部のものには計り知れないものがあるようである。

さて、第6章にあたる本稿では、小生が7年間お世話になった下宿のドウラン一家とのインタビューを取り上げる。対象は、下宿の女主人オルガ、その夫エルミニオ、長女グロリア、グロリアの夫ラウル、同居しているオルガの姪ロスリーの5人である。

ドウラン一家

オルガ・ソリア・サンチェス（70歳）

Olga Soria Sanchez

［質問――いつ生まれたか？］

――1935年1月14日、サンマルティン県ラマスで。

［質問――いつ結婚したか？］

――1958年8月14日リマで。

――1948年リマに来て技師の事務所で働いていた。

――1973年ビジャ・エルサルバドルに来た。CUAVES（自主管理都市共同体）の設立者の一人で、地区（マンサナ）を組織した。代議員選出のための選挙委員会の委員長だった。地区委員会は生き延びている。居住集団の指導部は変わった。CUAVESはいまだ部分的に機能している。ミッチェル・アスクエタ市長のときは生き残っていた。政治的理由により、統一を失った。

［質問――この家をいつ建てたか？

――1975年ごろだが、とても難しいことだった。少しずつ今も建て続けている。子供たちが大きくなり部屋が必要になって、娘が大学3年のとき一階を建てた。

［質問――現在何人が住んでいるか？］

――一階に私たち夫婦とママの３人、二階に長女夫婦とその子供の３人、三階に姪のロスリーとその妹のマリリンの２人で計８人だ。

――私は５人姉妹と２人兄弟の７人兄弟だった。現在は私がママの面倒を見ている。17歳のとき父は死んだ。

［質問――サンマルティンとビジャ・エルサルバドルのどちらがよいか？］

――13歳のときにサンマルティンを去ったのでリマに慣れている。５人姉妹はみなこちらに来ていて、男兄弟２人がサンマルティンに残っている。以前はサンマルティンに小学校しかなく、勉強のために大勢がリマにやって来た。今では大学や高校もある。

［質問――現市長のハイメ・セアについてどう思うか？］

――清掃はよくなった。道路はよくなってない。他は何もよくなってない。先市長は道路に手をつけたし、遊歩道を作った。

［質問――参加的民主主義についてどう思うか？］

――参加は組織化されたグループがなければダメだ。参加型予算はいくつかのグループにとってよいが、他のグループには役に立っていない。

［質問――この家の経済はどうなっているのか？］

――長男マヌエル［在イタリア］と長女グロリアが助けてくれている。

――以前は、ビジャ・エルサルバドルに来て店を経営していた。それで子供の面倒を見られなかった。やがて客が来なくなり店をやめた。

［質問――1973年当時と比べるとビジャ・エルサルバドルはよくなったか？］

――きわめてよくなった。若者たちはCUAVESを知らない。以前は、ビジャ・エルサルバドルの全員がCUAVESに参加していた。今は一部分だけだ。

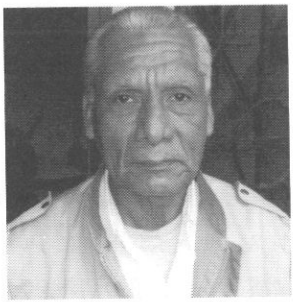
［質問――分裂していたCUAVESは2003年に再統一したがどうなったのか？］

――まだ弱い。会費を集めているが、一部の少数者が寄付も集めている。

――参加型予算のもとで２年間組織した。共同の家が欲しい。地区委員会の住民集会のためだけではない。身寄りのない老人が多いので老人のため、また子供の図書館にもしたい。働く母親のために保育園も作りたい。組織なしには何も手に入らない。

――以前は何もなかった、水・電気・下水・バスもなかった。CUAVESが行

進を行い、すべて勝ち取った。医師も教師もそうだった。
――最初は木造の家を建てたが捨てた。家財道具一切が盗まれたからだ。それでこの家を建てたが、建築家がいなくて困った。
［質問――CUAVES についてどう思うか？］
――最初は必要のために働いた。しかし、寄付が来るようになって変わった。多くの寄付が来た。少数の人間がそれを私物化した。それで組織も行き詰ってしまった。
――社会的所有企業の民有化に際しても、一部の者が利権を得、多くの住民には無関係だった。
――ビジャ・エルサルバドルはよくなった。しかし、職がない。現在若者たちに職がない。まだまだビジャ・エルサルバドルは貧困だ。



エルミニオ・ドウラン（70歳、オルガの夫）
Herminio Duránd
［質問――いつ、どこで生まれたか？］
――1935年生まれ、リベルタ県パカス・マヨで。
［質問――職業は何か？］
――モラベコ社（リマ）の工員だった。
――12歳のときリマに来て、1958年に結婚した。ビジャ・エルサルバドルには1973年に来た。
［質問――ビジャ・エルサルバドルはどうだったか？］
――平野で水も電気もなかった。それで CUAVES に参加した。
［質問――CUAVES とは何か？］
――一種のセンターで、市役所の代わりをしていた。
［質問――1984年市になってからはどうか？］
――少しずつ協働をはじめた。生活水準はよくなった。住宅もよくなった。
［質問――市長ハイメ・セアについて］
――前市長プマルよりはよい。ゴミの収集、ハエの駆除、病院など。

［質問――現在抱えている問題は何か？］

――仕事がないことだ。1年前からない。多くの人が仕事がない。若い人に多い。それで売春がはびこっている。以前にはなかった。今はペルー全体がそうだ。

［質問――どうしてこの家を建てたのか？］

――家を建てるのに苦労した。妻も働いていた。子供は少なかったが教育に投資した。妻もよく働いた。

［質問――ビジャ・エルサルバドルが好きか？］

――その通り。ミラフローレスに居たこともある。賃貸の家に住んでいた。そしてビジャ・エルサルバドルで犠牲の日を積み重ねた。

［質問――いつ働き始めたか？］

――リマに来てから働いた。パンを売った。映画館で雑誌や新聞を売った。19歳のときからモラベコ社で働き始めた。助手から主任になった。バス、冷蔵庫などを作っていた。ベラスコ時代、多国籍企業だということでつぶされてしまった。3500人の労働者がちりぢりになった。フジモリ時代、国営会社 CONASE で働いた。その後、バンコ・デ・クレディトの人が雇ってくれたこともある。顧客の一人だ。

――ビジャ・エルサルバドルでは仕事が少ない。手間仕事ばかりだ。ミラフローレス、サンイシドロに多い。

［質問――仕事の情報をどうして得たか？］

――たとえば、以前レストランで働いていたことがある。客に工場主任がいた。そして、モラベコ社を紹介してもらった。モラベコ社の仕事が一番好きだ。

［質問――今、何を考えているか？］

――米国のヒューストンに行くことを考えている。姪がいて仕事があるという。家計を子供たちに負わせたくない。働きたい。行かねばならない。ここには仕事がない。遠いけれど行きたい。長男も12年イタリアにいる。健康な限り働きたい。

［質問――次男はどうしているか？］

――イキトスで NGO で働いている。イキトスは物価が高くて大変だ。

――長女のグロリアが同居している。夫のラウルもいい人だ。

［質問――トレド大統領についてどうか？］

――たしかに道路はよくなった。しかし、失業を解消していない。いい職業を見つけても仕事がない、ない。高齢者にはなおさらない。

――今のペルーには労働の定着性というものがない。これはフジモリ時代から始まった。テロ対策はよかった。しかし、フジショックで組合をつぶした。国営企業に新しい労働者を入れた。さからえば別の労働者を雇う。フジモリは最初はよかったが、その後独裁になった。それで多くのストライキが起こった。

――普通50％値上げするが、ペルーでは100％、200％値上げする。そこで労働者が被害者になる。ペルーでは景気後退が激しい。

［質問――トレドの経済政策が間違っているのか？］

――彼はエコノミストなのに、自分のためのエコノミストだ。彼のサークルのためのエコノミストだ。

――姪は、月500ソル（1.5万円）で朝８時から夜８時まで働いている。結婚したらどうなるか、子供ができたらどうなるか。

――値上げが激しい。しかし、給料は最小だ。

――たとえば、企業家はジャガイモを50センチモ（15円）で買って、リマで２ソル（60円）で売る。スーパーのウオンやメトロは大量に仕入れるから少し安い。

――フジモリ時代以前は安定していた。問題はフジモリ時代に始まり、現在に続いている。

――ガスにしても輸出しているにもかかわらず、チリでは18ソルだが、ここでは３１ソルだ。そのガスを戸口から中に引くのに500ドルかかる。

――議会や大臣は何も生産していない。

――働けばより多く与え、少ない労働には少ない報酬をというのが当然だ。何も盗まず、居眠りしないことが大切だ。私は、仕事には常に30分前に行くことにしている。

グロリア・ベアトリス（46歳）

Gloria Beatriz Duránd Soria

［質問――職業は何か？］

――臨床心理士で、市の青少年・児童擁護局で働いている。

［質問――いつ生まれたか？］

――1959年3月28日、ミラフローレスで生まれた。1987年結婚した。

［質問――市当局は今どうなっているのか？］

――業務に戦略がない。政策が問題だ。理論化のテーマは公共清掃と市の安全である。

――参加型予算により、すべての地区の住民が参加するようになった。多くの代表者たちが、ビジャ・エルサルバドルを指導したがっている。組織化、非組織化にかかわらずに参加している。代表者たちの目的は基礎を作ることだ。現在は、組織化に着手しており、プロセスへの参加を呼びかけている。国庫からも出資し、市の資金に追加している。したがって、市長の一存では決められない。みんなの予算だ。9地区から自身のアイデアによりプロジェクト案を出す。1509人が登録済みで、参加型予算に参加した。このようにして、参加的民主主義が進んでいる。

［質問――市会議員は何人いるか？］

――13人で4年が任期。

――市長は擁護局に制限はしない。しかし、予算という経済的限界がある。市長に意思はあるが、仲介者なので全てを要求はできない。優先しているのは、清掃と安全だ。たしかに清掃は進歩した。

――ジェンダー、つまり女性問題も扱っている。公平を問題にしている。しかし予算が少ない。1993年擁護局の新構造をめざした。市法制にもとづき、部局の刷新を試みた。結局、地方政府内の資料として処理した。

――他の前進は徴税政策だ。ほぼ滞納はない。

――参加型予算により、住民が行政に参加しはじめた。「公開市議会」を要求

しつつある。

――国際的援助も大きい。オランダ（アムステルダム）からは公共清掃に、スペインからは青年・教育問題に、国連からはジェンダーのテーマに、EU からも市に援助を行っている。

［質問――CECOSAM（精神衛生共同体センター）を知っているか？］

――知っている。ビジャ・エルサルバドルで最初の精神衛生センターだ。

――当市では家族問題が大きい。統合性がない。4・5年ですぐ離婚する。認知されない子供や、養育費、親権などが問題だ。それで働いている子供がいる。また、家庭内暴力、児童虐待などの問題もある。性の氾濫の問題もある。

［質問――原因はやはり貧困か？］

――そうだ、貧困との闘いのプランの一部だ。擁護局は、学校、共同体、教会と関係を持ちながら、全国組織の一員として対処している。

――青少年については、麻薬、アルコールの問題がある。

――また、両親による虐待の問題がある。8歳や9歳の子供が悩んでいる。子供を夫婦関係の証拠としてしかみなしていない。次々に男を変え、子供を作る。3人の夫を持つ女性がいる。これは違法だが、自由意志による。母と父の姓をもっているかいないかで法律上差別がある。母の姓しかもっていないと差別される。このようなケースは多くはない。民法上は10歳で姓が定まることになっている。

――アイデンティティの問題も大きい。結婚相手をもっていないと社会的偏見を受け行政上の問題とされる。結婚相手が地方にいるとき、経済的資源がないので連れて来れないことがある。プロジェクトを組んでいるが、市が結婚相手の問題を解決できることを知らない。しかし、擁護局には資金がなく経済的に多くはできない。アイデンティティの権利が認められるべきである。そのためには、国家が防止のための予算を組むべきである。バソ・デ・レチェ（粉乳の配給制度）の例もある。国が市に援助を与えた。他国では母の姓しか使わない。それで十分だ。

――結婚が問題だ。夫婦の法制上の根拠が確立していない。

［質問――結婚は法制婚か？］

――そうだ。

――しかし、認知されない子供の問題がある。2年暮らせば権利ができるが、守られていない。遺棄された子供の問題が大きい。それで働いている子供がいる。必要性からや、好きだからというのが理由だ。母とのみ暮らす子供がいるかと思えば、子供たちだけで暮らしていることもある。しかし、市に能力がない。60％は観察し、40％は予防する。

――養育費が50％は問題になる。親権、訪問体制も問題だ。

――青少年の非行問題もある。軽ければ擁護局が扱うが、重ければ更正センターに送られる。青少年の中には泥棒をする者や浮浪する者がいて、解決は困難だ。しかし、非行は大きなテーマではない。

――今は女性が働くことが多いので新しい問題が起こりつつある。女性は同時に家庭を見なければならない。しかし、仕事を通じていろんなことを知る。そして、夫も子供も見捨てることがある。女権が強くなっている証拠だ。

――1995年のことだが、父が5子を見捨てた。妻に戻るように頼んだ。なぜ子供の面倒を見なければならないのかと、妻はいった。家族の危機が存在している。

――それに加えて、ポルノの氾濫、インターネットの害の問題等があるが、われわれはそれに対して十分な準備ができていない。

ラウル・ポシ（46歳、グロリアの夫）

Cesar Raúi Pozzi Ruiz

［質問――いつ、どこで生まれたか？］

――1958年8月26日、サンマルティン県ラマスで生まれた。

［質問――職業は？］

――会計士。サンマルコス大学を卒業した。

［質問――いつビジャ・エルサルバドルに来たか？］

――1980年はじめて来た。大学の会計学部事務局に所属しており、子供の映画のプロジェクトが大学であり、それで来た。1987年結婚した。それで本格的に

移住した。

――グロリアとはラマスで知り合った。グロリアは1年間ラマスの中学校に通っていた。1975年のことだった。8年後リマで再会した。

――父は教師で、私も教師になりたかった。6人兄弟で、母は専業主婦だった。中学校を終えて父が聞いた、「何になりたいか？」と。「教師」と答えた。父は貧しかった。土地も失っていた。兄弟で6個のタマゴを分け合った。「教師の生活はこうだ。何を食べているか？経済的に苦しいぞ」父は言った。けれども教師になりたかった。「ラテンアメリカ一の大学サンマルコスへ行き、会計士になれ」父は言った。

――リマの高校に入り、サンマルコス入学をやめた。教師になりたかった。キューバの雑誌『フベンツ・レベルデ（反乱青年）』を読んでいた。ホセ・マルティの文章を読んだ。

――チョシーカにあるカンツータ教育大学に入学した。学生連盟に入り、やがてパトリア・ロハ（赤い祖国）に入党した。毛沢東主義、マルクス・レーニン主義政党だった。

――入学試験の前ぜんそくにかかり、17日間入院した。父が病院に来て、入試に付き添ってくれた。そしてカンツータの入試に合格した。

――その後モラレス・ベルムーデスの独裁期に、カンツータ大学が政治化していたため、大学を閉鎖した。センデロ・ルミノソも活動を始めていた。パトリア・ロハは権力掌握かそうでないかに分裂した。バングアルディア・レボルシオナリア（革命的前衛）が強かった。人民戦争、武装闘争路線をとっていた。

――ある朝、大学のテントで寝ていると爆弾が炸裂した。何人かが死んだ。ベルムーデスの軍事的干渉だった。カンツータ大学の事件は有名になり、父が母を送ってよこした。私は食糧がなく体重が40キロになっていた。軍の干渉で教師になる道は終わった。1977年ラモスに戻った。父は言った「土地がある。農民になれ」。こうして私の人生の第一期は終わった。

――父には土地がなかったが、叔父が土地を持っていた。1978年農業をした。トウモロコシ、フリホル豆、バナナ、ユカを栽培した。かたわらラモスで中学生や教師の若者を組織した。昼間農作業をし、夜集会を持って、政治活動を行っ

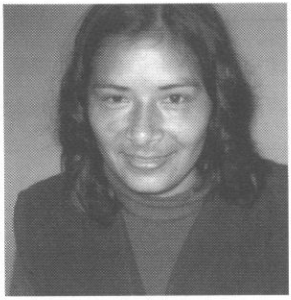
た。

――やがて、父に連れられてリマに来た。ラウル・バルダスの工場を紹介され、そこで働いた。ビジネスに手を染めた。経理を担当した。収支表を見なければならなかった。そこでサンマルコス大学会計学部に入りなおした。こうして、私の人生の第二期が始まった。大切なことは、職業人として人間になることだ。父の教えは、働くことだった。

――７時に仕事を終え８時に大学へ行った。２時間だけ授業を受けた。５年の課程だった。働き学ばねばならない。28歳のときに卒業した。

――1982年ごろグロリアに会った。1987年結婚した。家に困った。兄弟がいたが、グロリアは同居を拒んだ。そこで、すべてを買いなおし、ゼロから出発した。オルガに家に来ないかと誘われて、２階を建てた。

――ビジャ・エルサルバドルに来て、貧困に直面した。社会階級は存在すると思った。自分はサンイシドロ［高級住宅街］に近いリンセに住んでいたが、ブルジョワ化していると感じた。ラモスでは中心地区に住んでいた。ここで現実に目覚めさせられた。そして政治的になった。人間の尊厳とは何か、アイデンティティとは何か、教えられた。ここには真の連帯があった。グルポ18の書記長になった。ビジャ・エルサルバドルは組織的で民主的だった。1988-1990年センデロ・ルミノソの攻撃があり、マリアエレナ・モヤノの暗殺があった。私も脅迫されたがCUAVESの集会にグルポの書記長として参加した。子供の問題、医療、教育の問題があった。民衆放送局ではじめて教師として教えた。自由大学と呼ばれていた。子供から女性までが勉強した。しかし、就職するとき資格がない。修了証が欲しいと生徒たちが訴えた。そこで、マリアエレナ・モヤノ職業教育センターの１年間のコースを作った。やがて、マリアエレナ・モヤノ高等学院の３年間のコースを作り、卒業証書も発行した。やがて民衆放送局と別れ、第四コレヒヨのプロジェクトで働いた。私の人生の第二期はやがて終わる。２つの社会生活で15年間学んだ。ここでは、『ビジャの友』というインターネットの雑誌を作った。会員は14～15人だった。しかし、リーダーシップは水平的であるべきで、垂直的ではいけない。これからは、第三期としてビジネスをやりたい。サンイシドロからイキトスに活動範囲を広げる予定だ。



ロスリー・ソリア・ルイス

（27歳、オルガの姪） Rosly Soria Ruiz

［質問――いつ、どこで生まれたか？］

――1978年２月４日、サンマルティン県ラマスで生まれた。

［質問――いつビジャ・エルサルバドルに来たか？］

――1995年12月27日。看護師学校で３年間勉強した。2000年卒業した。看護師として働き始めた。医療センターなどで働き、今は３つ目のセンターで働いている。

――2004年１月７日からは老人の介護施設で働いている。リマ市営で身寄りのない見捨てられた老人を引き取っている。

――給料は最初600ソルだったが、500ソル（1.5万円）に下がった。安くて仕事はきついが、今は仕事がないので仕方がない。サンファン・デ・ミラフローレスにある。勤務は８時から８時まで12時間労働だ。看護師が15人いて、技師などと合わせて19人働いている。通勤時間は30分だ。

［質問――ビジャ・エルサルバドルが好きか？］

――もちろん、もう10年住んでいる。今は妹のマリリンと一緒に住んでいる。

［質問――なぜビジャ・エルサルバドルに来たか？］

――勉強する機会がなかったからだ。サンマルティンには施設がない。

［質問――将来の夢は何か？］

――旅行がしたい。ここには何もない。いい給料がある国へ行ってみたい。外国を知りたい。今は妹の世話で手が一杯。

［質問――ハイメ・セア市長をどう思うか？］

――ゴミ、清掃、道路などよくなった。また立候補したら投票する。

［質問――オルガ叔母さんについてどう思うか？］

――いい人だ。慈愛に満ちた人だ。誰でも歓迎する人だ。

［質問――三階での生活はどうか？］

――静かだ、妹と二人きり、必要なものはみんなある。

［質問――今の生活に満足しているか？］

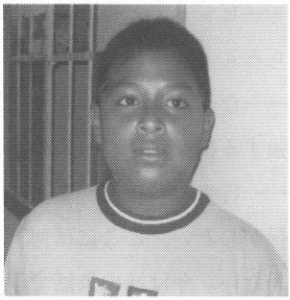
――部屋が小さくて私のもので一杯になっているが、今の生活で満足している。

その他の家族

ロスリーの妹マリリン19歳

オルガの母マリア88歳

15歳の老犬キッド



グロリアの長男
ファブリシオ11歳

むすびにかえて——貧困の経済学試論

1971年スラムとして発足したビジャ・エルサルバドルは、1984年市に制定されたが、いまだ貧困都市の枠から抜け出せてはいない。ここに紹介したのは典型的なビジャ・エルサルバドル市民の真摯な声である。オルガは初期のビジャ・エルサルバドルで機能を発揮した自主管理都市共同体CUAVESについて語り、その変質を嘆いている。

その夫エルミニオは、失業の悩みを訴えている。娘のグロリアは、地方政府が取り組んでいる参加型予算を通じての参加的民主主義について語り、いまだ課題の大きさ多さについて率直に語る。その夫ラウルは、その数奇な運命について語り、ビジャ・エルサルバドルにおける連帯と民主主義について語ってくれた。オルガの姪ロスリーは自分の過酷な生活について正直に話してくれた。

ここに語られた現実は、われわれ日本人には程遠い想像をはるかに越えたものであろう。しかし、これが21世紀の人類が直面している真の現実なのである。翻ってみれば、われわれ日本人も敗戦の荒れ野から復興を成し遂げたではないか。違いは、彼らペルー人には自ら救える能力をはるかに越えた現実が「貧困」なのだということである。われわれ人類は彼らを救えるのであろうか？もはや自助の努力には限界がある。なんとかして、国際的な互恵・再分配のシステムを打ち立てるしか道はないように思われる。

かたや21世紀の世界システムには、とりわけアジアにおいて見過ごせないさまざまな変化が押し寄せている。それを素描してみよう。

グローバリゼーションは、もはや誰も否定できない現実であろう。この現実の中においてペルーをはじめとする周辺部は、どのような役割を果たしているのであろうか？受動的にグローバリゼーションの波の中に飲み込まれつつあるといわざるを得ないのではなかろうか。この21世紀の変化する世界現勢の中で、次のような変化と展開がアジアにおいて見られつつあるといえるであろう。

1） NIEs諸国の半周辺化。これらアジア諸国が今や半周辺（Semi-periphery）

と化したことに反対する人はおそらくいまい。これら諸国の問題点は、その対外的脆弱性であり、それは1997年の東アジア通貨危機において暴露された。今は沈静化したこれら諸国は、その外発的発展（外国資本・外国技術・外国市場）という宿命を宿しているかぎり、危機はいつ再燃するかわからない運命にある。

2）ニューセンター（New-center）としての中国・インドの台頭。アジアにおける大きな変化として、中国およびインドの経済大国化が挙げられよう。中国は人口13億の市場大国であり、外国資本と外国技術により急速な発展を遂げつつある。インドは人口11億の市場大国であり、急速な人口成長のさなかにあり、数年のうちに中国を追い抜いて15億の大国となるであろう。そのIT分野における教育・産業における成長には目を見張るべきものがある。無論両国ともに深刻な国内問題を抱えており、前途は多難である。しかし両国ともにアジアのニューセンターとして台頭する日は近いとおもわれる。

このようなアジアにおける変化に比べると、1997年の通貨危機の影響を1998年受けたペルー経済は、それ以来沈下したままである。そして周辺国ペルーの郊外都市ビジャ・エルサルバドルにおいては、インターネット（レンタル・インターネット）の店が増えた以外、グローバリゼーションの波は打ち寄せていないように見える。このようなローカルの現実からすれば、必要なことはローカル・エンパワーメントであり、地方政府の権限を強化し、自らのうちで参加的民主主義をさらに深化し、これらローカルの努力を援助するNGOやNPOそして中心国の市民社会による理解と支援により、国際的な互恵・再分配のシステムを築き上げることであろう。従来の経済学は、経済主体として、国家と市場しか考えていなかった。今や第3の主体として市民社会を考えるべきときである。このような国際的な新しい社会システムを、仮に市民的社会主義と呼ぶことを提唱する。

2006年11月15日

大阪経済法科大学研究室にて

参考文献目録

原田金一郎

2000 「自主管理都市共同体ビジャ・エルサルバドル——代替的社会主義論のためのフィールド・ノート（予備的省察）」大阪経済法科大学『経済学論集』第23巻第3号

2001 「ビジャ・エルサルバドルにおける社会主義と工業団地——自主管理社会主義から住民コミューンへ」『経済学論集』第24巻第3号

2002 「ビジャ・エルサルバドル精神衛生共同体センター——周辺社会における貧困と精神衛生」『経済学論集』第25巻第3号

2004 「ビジャ・エルサルバドル地方政府——自主管理社会主義から参加的民主主義へ」『経済学論集』第27巻第3号

2006 「ビジャ・エルサルバドルにおける女性組織と教会——貧困と闘う救世主の町」『経済学論集』第29巻第2・3号合併号